

授業科目の概要

Table of Contents

P50 外国語科目

P52 GLA基礎科目

P54 基礎教養科目A群

P58 基礎教養科目B群
 専門教養科目 Humanities (人間と文化)

P59 専門教養科目 Societies (社会と共生)

P60 専門教養科目 Global Studies (グローバル・スタディーズ)

P61 演習科目 基礎演習
 演習科目 講読演習

P63 演習科目 研究演習

P64 神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部 3つのポリシー

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
外国語科目 英語科目	Academic Reading (a)	大学で必要とされる英語リーディングスキルの基礎力を高めるために、アカデミックな内容を精読・多読することを目的とする。精読では、アカデミックな題材で使われる語彙や文章構成に慣れ親しみながら、文法や接続詞の使い方に注意して筆者の意図を正確に読み取り、さらに文全体の流れをとらえながら概要を把握する。多読では精読で扱ったトピックと関連するものを複数読み、さまざまな意見を理解しながら批判的に考える力を養う。
	Academic Reading (b)	Academic Reading (a) の内容をさらに発展させ、アカデミックな内容を精読・多読することを目的とする。リーディングを受動的なものではなく能動的な活動ととらえ、読みながらその先を推測しつつ批判的に考え、さらに読解スピードを高めることで、2年次の英語科目やBridge CLIL Coursesにおけるリーディングとライティングへつなげる。また、ある決まったトピックに関する文章を多読することによって、さまざまな意見を体系的にまとめながら理解する練習も行う。
	Academic Writing (a)	大学で必要とされる英語ライティングスキルの基礎力を高めるために、アカデミックな内容を精読しながら語彙や文法の確認を行い、それらを正しく効果的に使いこなせるようになることを目的とする。中学・高校英語を「理解」するレベルから「応用」できるレベルに達するため、高校までに学習した英語を発展させ実際のライティングで使えるようになることをめざす。Academic Readingと連携させ、読んだものを要約する練習や、その内容に対する自分の意見を書く練習も行う。
	Academic Writing (b)	アカデミックな内容を読み、それを正確に理解した上で内容を批判的に考え、自分の意見をまとめることを目的とする。個人的な意見だけではなく関連する文献を集め、そこに書かれている情報も取り入れながら説得力のある意見としてまとめる。そのために図書館での文献の探し方なども学ぶ。また、教員からのフィードバックだけでなく、ピアフィードバックも積極的に取り入れ、フィードバックとそれにもとづく修正が効果的に行えるような訓練も行う。
	Academic Discussions & Presentations (a)	アカデミックな場面で必要となるディスカッションやプレゼンテーションのスキルを身につけることを目的とする。学生はアカデミックな題材を読み、ディスカッションを行う上で自身の意見や主張をどのように組み立てるのがよいかを学ぶ。また効果的なプレゼンテーションを行うには参考文献や視覚教材をどのように用いればよいかについても学習する。学生は自身のプレゼンテーションを振り返り、話し言葉による効果的なコミュニケーションを実現するための改善点について考える。
	Academic Discussions & Presentations (b)	一般的なディスカッションやプレゼンテーションに加えてアカデミックなディスカッションやプレゼンテーションの方法について学ぶとともに、ディスカッションにおいて相手の意見を積極的に聞き、それに対する適切な反応の仕方を学ぶことを目的とする。学生はアカデミックな文献を収集し、整理し、それをプレゼンテーション内で提示すると同時に、自身のプレゼンテーションを振り返り、話し言葉による効果的なコミュニケーションを実現するための改善点について考える。
	English for Academic Purposes (a)	効果的な自律学習に必要な英語運用能力と学習スキルを身につけることを目的とする。社会の諸事情に対する理解を深めながら英語を「使う」ことを中心として、大学入学までに習得したアカデミックな英語運用能力をさらに伸ばす。同時に、SALC (Self-Access Learning Center) のラーニングアドバイザーからのサポートを得ながら、自律学習と協働学習のためのスキルも習得する。(※SALC: Self-Access Learning Centerは、学生の授業外における英語学修支援施設。)
	English for Academic Purposes (b)	English for Academic Purposes (a) から継続して、効果的な自律学習に必要な英語運用能力と学習スキルを身につけることを目的とする。特に自然科学や人文学に対する理解を深めながら学生のもっているアカデミックな読解力をさらに伸ばすことを目的とする。指導教員によるアドバイジングを通して学習全般と大学生活について確認をする。または、SALC (Self-Access Learning Center) のラーニングアドバイザーからのサポートを得ながら学生は自律学習に必要な学習スキルを習得する。
	Self-Directed Learning	言語の効果的な学び方、学習への自主的な取り組み方、SALC (Self-Access Learning Center) の効果的な利用方法について学ぶ。自分で自分の目標や興味にあった学習プランを立て、実行することで、語学スキルの向上をめざす。SALC (Self-Access Learning Center) のモジュールは自律学習者になるための方法を学ぶコースであり、いつ、どこで、どのように学習するかを、ラーニングアドバイザーのサポートを受けながら学生自身が決めることができる。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
外国語科目 英語科目	TOEFL ITP 演習	アカデミック英語の基礎力が不足しており、留学準備としてTOEFLの学習が必要な学生を対象とした授業である。TOEFLの問題集やアカデミック英語の補助教材を使いながらアカデミック英語に慣れ親しみ、留学先で要求されるTOEFLスコアに近づけ、アカデミック英語の力をさらに伸ばすことを目的とする。またSALC (Self-Access Learning Center) によるモジュールを利用しながら自律学習を行うことで、自ら学習計画を立て、実行し、振り返り、次の学習をさらに効果的に行う力を養う。
	Critical Reading (a)	3年次に予定されている海外留学の準備として、さまざまな専門分野の入門レベルの題材を正確に読解し、批判的にとらえることを目的とする。例えば、複数の文献を個別のものとして理解するのではなく、お互いの関連性に注意しながらまとめる力を養う。さらに、海外留学でのリーディング課題は量的に相当なものとなることを踏まえ、その準備として読解量を増やし、多読に慣れるとともに、読んだ内容をもとに自分の意見をもつことも促す。
	Critical Reading (b)	Critical Reading (a) におけるリーディング学習をさらに発展させ、海外留学におけるリーディングに向けての準備を進める。また、留学終了後の4年次に行う卒業研究(キャプストーン・プロジェクト)に向けた準備として、Advanced Writing (b) の授業と連携しながら、自ら立てるテーマに沿って文献を集め、その内容を批判的に考える。海外留学が卒業研究(キャプストーン・プロジェクト)に結びつけられるように、リーディングの観点からその内容も吟味する。文献をまとめる際には、内容を並べるのではなく、お互いの関連性を理解した上でまとめる練習を行う。
	Advanced Writing (a)	3年次に行う海外留学の準備として、さまざまな専門分野の入門レベルのマテリアルを正確に読解し、その内容を批判的に吟味しながら関連性を考えてまとめ、自分の意見も取り入れて書くスキルを身につけることを目的とする。また、読んだものすべてについて言及するのではなく、どの文献を使うのか、その中でもどの部分について言及するのかといった適切な判断ができるような練習も行う。さらに参考文献の言及の仕方やリストの作り方も学習する。
	Advanced Writing (b)	4年次の卒業研究(キャプストーン・プロジェクト)に向けた準備として、Critical Reading (b) の授業と連携しながら、自ら立てるテーマに沿って文献を集め、その内容を批判的に考え、まとめ、必要に応じて自ら調査をして検証する。調査は海外留学中に行われることも想定し、事前の準備を周到に行い、帰国後の卒業研究(キャプストーン・プロジェクト)が質の高いものとなることをめざす。さまざまな論文や関連文献を読みながら研究論文の構成も把握し、留学先で課されるレポート課題にも柔軟に対応できる力を身につける。
	English for GLA I (Introduction to Global Issues)	英語で行われる専門科目を履修するために必要な英語運用能力を身につけながら、グローバル社会で起こりうる諸問題について学び、批判的思考力と効果的なコミュニケーションスキルを伸ばすことを目的とする。学生は文献を読み、与えられたテーマを批判的に捉えながら、諸問題の要因と結果について考える。また他の学生との協働学習を通じて諸問題への理解を深めながら、それらの問題への創造的な解決策を見出す。
	English for GLA II (Media Literacy)	英語で行われる専門科目を履修するために必要な英語運用能力を身につけながら、批判的思考力と効果的なコミュニケーションスキルを伸ばすことを目的とする。メディアの特質について理解し、幅広く、かつ批判的に捉えるとともに、英語運用能力を伸ばしながら批判的思考力と効果的なコミュニケーションの方法を身につける。学生はさまざまなタイプのメディアにふれながら、情報がどのように提供・伝達・解釈されて、個人や社会にどのように影響しているかについて学ぶ。またメディアが送り出すメッセージと現代社会に与える影響についても分析する。
	English for GLA III (Global Communication)	英語で行われる専門科目を履修するために必要な英語運用能力を身につけながら、批判的思考力と効果的なコミュニケーションスキルを伸ばすことを目的とする。異文化コミュニケーションに関連するトピックについて学びながら英語運用能力を発展させる。学生は、さまざまな文化をもった人々について理解し、異文化コミュニケーションにおいて文化がどのような役割を果たしているか批判的に考える。またさまざまなコンテキストにおいて文化背景の異なる人々がどのようにコミュニケーションを図っているかについても学ぶ。
	English for GLA IV (Peace Studies)	英語で行われる専門科目を履修するために必要な英語運用能力を身につけ、さらに平和と紛争に関わる主要なテーマやさまざまなアプローチについて考えながら、批判的思考力と効果的なコミュニケーションスキルを伸ばすことを目的とする。平和研究と平和教育の成り立ちを学びながら、いじめや偏見のない社会の実現やグローバル市民の育成に向けて平和教育がどのように貢献できるかについて、多角的かつ批判的に考える。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
外国語科目 選択外国語科目	English for GLA V (Sustainable Development Goals)	英語で行われる専門科目を履修するために必要な英語運用能力を身につけながら、批判的思考力と効果的なコミュニケーションスキルを伸ばすことを目的とする。2015年の国連サミットで採択された17のSDGs (Sustainable Development Goals) について、まずその背景や概念を理解し、これらの目標を達成するために世界各地でどのような取り組みが行われているかを知る。人間の生活が地球環境に及ぼす影響について批判的に検討しながら、それぞれの目標が世界各国の生活とどのように関わっているかについて考える。さらに、クラスメートと協力しながらこれらの目標を達成するための独自の解決方法を探る。
	中国語	選択外国語として、12カ国語から選ぶことができます。
	スペイン語	
	韓国語	
	フランス語	
	ドイツ語	
	ロシア語	
	イタリア語	
	アラビア語	
	ポルトガル語	
ベトナム語		
インドネシア語		
タイ語		
GLA基礎科目	グローバル・ディスカバリー-I	1年次必修のグローバル課題学習と課題解決について考えるPBL (Project-Based Learning) 型の授業である。私たちを取り巻く世界はどんな世界なのか?どんな課題があるのか?そして、そのために私たちは何ができるのか?それを学んで考えるための第一歩として、最初の学期でグローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)に参加する。この授業はそのための第一ステップとなる。グローバル課題に関する課題図書を読んでディスカッションをする。また、社会課題解決を実践している人物や団体を訪問し、協働学習を通して、学生が主体的に学び、行動するマインドセットを身につける。
	グローバル・ディスカバリー-II	1年次必修のグローバル課題学習と課題解決について考えるPBL (Project-Based Learning) 型授業の実践編、グローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)の事前ならびに事後の学習を行う。グローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)で訪問する国について、現地の歴史や宗教、抱える社会課題や取り組みについて事前に調査し、インプットを行う。また、現地のグローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)における心構え、調査の項目や期待される結果など、事前にスタディ・プランを策定する。グローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)から帰ってきた後は、事後学習として、そこでの学びや気づきなどをグループごとにまとめて、スタディ・プランの成果を発表し、全員で共有する。また、そこからの学びを今後の学生生活にどう活かすか、今後、どのようなことを学びたいのかなど、大学でのスタディ・プランにつなげていく。
	グローバル・ディスカバリー(フィールドワーク)	この授業科目では、入学直後の6~7月頃に、リトアニア、インド、マレーシア・ボルネオ、エルサレムに赴き、異文化や異環境下での体験をさせるとともに、平和、多様性、多民族、格差、貧困からの脱却、移民・難民問題など、行く国・地域により課題設定をさせ、1年次後期以降の学修の動機づけをさせることを目的とする。この授業科目に先立ち、グローバル・ディスカバリー-I、II及びアドベンチャーコミュニケーションプログラムで事前・事後学習を行う。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
G L A 基礎科目	グローバル・リベラルアーツ入門I	<p>【グローバル時代の教養とは何か】(オムニバス方式)</p> <p>グローバル・リベラルアーツ入門は、グローバル・リベラルアーツ学部カリキュラムの基本理念である「平和のためのグローバル教養(Global Liberal Arts for Peace)」の意味を学び、学生各自が4年間を通じての学びを自ら方向つけていくためのオリエンテーションとなる基礎的な科目である。この科目では、本学部で身につけられる探究の内容と知識の内容の基礎を学び、専門教養科目へ橋渡しすることをめざす。このような科目の目的により、授業は複数の教員が担当するオムニバス方式を採用。グローバル・リベラルアーツ入門Iでは、グローバル時代の教養とは何であるかを考える。授業の各回では、文学、哲学、宗教学、歴史学、日本思想論、社会学の各学問領域の探究対象と考え方の講義とそれにもとづくディスカッションを通じて、グローバル時代の教養とは何かを考えるとともに、学問的な知識と論理を支えに批判的に考えることの重要性を理解することをめざす。テーマは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イントロダクション／哲学の視点から:「教養」の原点と現代 ・平和と共生のための歴史学 ・共生社会の実現のために ・宗教について考える:伝統と現代 ・文学と共生 ・日本文化から何を学ぶか ・未来社会を考える
	グローバル・リベラルアーツ入門II	<p>【グローバル時代の平和について考える】(オムニバス方式)</p> <p>グローバル・リベラルアーツ入門は、グローバル・リベラルアーツ学部カリキュラムの基本理念である「平和のためのグローバル教養(Global Liberal Arts for Peace)」の意味を学び、学生各自が4年間を通じての学びを自ら方向つけていくためのオリエンテーションとなる基礎的な科目である。この科目では、本学部で身につけられる探究の内容と知識の内容の基礎を学び、専門教養科目へ橋渡しすることをめざす。このような科目の目的により、授業は複数の教員が担当するオムニバス方式を採用。グローバル・リベラルアーツ入門IIは、言語・社会・国際関係の領域から平和について考える。テーマごとにミニ講義・ワーク・ディスカッションを通して、アクティブラーニング形式で授業を展開する。テーマは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イントロダクション／「平和」とは何か ・ことばと平和 ・グローバルな平和 ・地域と平和(アジア・中国と世界) ・地域と平和(ヨーロッパと世界) ・コミュニティと平和
	グローバル・ヒストリー	<p>本授業では、16世紀以降の世界の近現代史がどのような歩みを辿ってきたのか、現在までの各時代において世界の動きを牽引した流れと中心的な事象を把握する。そして、そうした過程が現代の世界とどうつながり、今日のさまざまな現象と連関しているかについて理解する。その際、とくにヨーロッパや西洋世界の事象に目を向けながらも、それが同時代において、日本を含めた世界の他地域の出来事とどのように結びついてきたかに関してまた考察を深める。そうしたヨーロッパと世界の関係から世界史を考える作業を通して、グローバル化が進む現代の私たちの社会・地域・世界において、過去とどう向き合い、現在の立ち位置をどのように理解し、捉え直すことができるかについて、歴史的に考える視点や知見を学ぶ。</p>
	キャリアデザイン(GLA)	<p>キャリアデザインとは、外部環境(国際経済・社会、技術革新)や労働環境(新卒・転職・起業)を理解したうえで、大学進学後の進路(ゴール)とその道筋(パス)を考えていく授業である。グローバルな舞台でグローバル・リベラルアーツ学部での学びを活かすにはどのような仕事があるのか。多国籍の人々が集まる組織ではどのような英語運用能力が求められるのか。外国人と一緒に仕事をするために必要なことは何か。仕事と家庭・子育てをどう両立させるのか。おカネとどう向き合えばいいのか。講義やグループディスカッションを通して「人生100年時代」を見据えた仕事と人生について考えるとともに、グローバル人材としての資質も身につけていく。外国人と英語で仕事をするための準備講座のため、授業は英語と日本語を併用する。</p>

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容	
G L A 基礎科目	アドベンチャーコミュニケーションプログラム(GLA)	<p>アドベンチャーコミュニケーションプログラムは協力が求められる身体活動やコミュニケーションアクティビティ、課題解決・意志決定を促す活動で構成され、グランドアクティビティやローエレメント(1)、ハイエレメント(2)などユニークな活動を体験する。これらはグループ活動が用いられ、グループの状態によって活動内容が異なる。それらの体験学習を通し、学びのプロセスを身につけ、お互いを認め、尊重し合うこと、柔軟な心でコミュニケーションができること、チャレンジの大切さを学ぶことを目標としている。</p> <p>(1)ローエレメント:比較的地面に近い位置に設置されたローブスコース(人が互いに支え合い安全を確保する)</p> <p>(2)ハイエレメント:地上から高い位置に設置されたローブスコース(参加者が命綱(ビレイ)を使ったシステムで安全を確保する)</p>	
	グローバル・キャリア	<p>私たちはグローバル社会ではマイノリティな存在である。そのマイノリティがマジョリティや、他のマイノリティと組んで仕事をする時代に完璧な経営手法や唯一の組織論は存在しない。正解のないこのような状況において、自分らしいキャリアを確立するために、どのような資質や態度、考え方が必要なのか。この講義では、グローバル化する社会で自分のキャリアを確立し、世界にインパクトを与えているプロフェッショナルたちの事例から、自己流のキャリアを確立するための思考や態度を、講義やグループディスカッションを通じて学んでいく。また、現在の自分と彼等の比較を通じて、自己を客観視する力を身につけるとともに、自身が描く卒業後のグローバル・キャリア像に対する課題を抽出し、アクションプランを立てることで、3年次後期の長期海外留学での実践につなげていく。講義は英語と日本語を併用する。</p>	
基礎教養科目	A 群	歴史学I	<p>現代社会に地球市民として生きる私たちは、日本と世界の関わりがいかにあつたかを常に意識し、理解することが求められる。それは、ビジネスを始めとする多くの場面においてコミュニケーションを図る上で最も重要な知識の一つである。本講義では、その一助となるために、近代日本の出発点となった明治維新史を世界史(国際関係史)の中に位置づけながら、国内政治史に留意しつつさまざまな外交事象から詳解する。研究史や最新の研究動向にも言及するが、日本史の知識が十分でない受講生のために、歴史用語等の説明も十分に行う。</p>
		歴史学II	<p>高校までの日本史のイメージは、知識の供給=暗記科目であろう。しかし歴史学の本質は、史料から過去の人間生活を探ることである。この講義では、鎌倉時代から江戸時代までの特徴的な事項を対象として、過去の人間生活を再現することを目的とする。鎌倉時代以降になると、庶民の生活を知ることができる史料が残されており、人々がどのように生きていたのかわかるようになる。特に江戸時代は、我々の生活に直結するような暮らし方もされ、今日残る地名などからも歴史の手がかりを得ることができる。このような時代を、さまざまな史料から再現してみたい。</p>
	哲学I	<p>哲学は、人間や世界についての根本的な問いを探求する営みとして古代ギリシアで始まり、そこから諸学問をも生み出してきた、およそ理性を用いた学問的営みの根幹となるものである。この授業では、哲学史の大きな流れを踏まえつつ、哲学的営みとはどのようなものであり、一般的な学問(科学)や宗教、芸術などの営みとどのように似て異なるものなのか、また哲学史上の主要な問いと探求方法はどのようなものか、先行する思想がどのように批判的に継承され新たな思想潮流を生み出したかなどの史的事例を通じて、哲学的営みの意義と価値を学ぶ。</p>	
	哲学II	<p>この授業では、哲学史に大きな影響を与え思想潮流として範型を為してきた特定の哲学者や思想史上のテーマをめぐって講義し、その思想的営みの歴史的意味や重要な概念を学ぶと同時に、現代の我々も共有しうる思想的な普遍性について議論したい。これらを通じて、哲学することの生活上の意義や、現代に生きる我々が過去の哲学・思想から学ぶことの意義を考察する。</p>	
	倫理学I	<p>生と死——これは、人間の、そして倫理の究極テーマである。この授業では日本の倫理思想を取り上げ、近現代から近世へとさかのぼり、先人たちがつかみ取ってきた生と死をめぐる真理の一端に内側からふれることをめざす。いまを生きる受講者が、真に人間らしく生き抜くことを問い続ける力を養う。</p>	
	倫理学II	<p>人と人が関わり合うとき、言葉と言葉が交差し、これにより意味が生まれたり、取り換えられたりする。言葉ひとつで、倫理はそのあり様を変えられてしまう。この講義では、言語と倫理の関係を、具体的に感じ取りつつ、考察する。倫理形成の基盤となる言語の働きに習熟することにより、さまざまな状況を比較総合し、おのれの倫理的立ち位置を自覚し表現できるようになることをめざす。</p>	

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
基礎教養科目 A群	宗教学I	現在地球上で大半の人々が何らかの宗教を信じている。したがって、今後国際社会で活躍しようとするならば、さまざまな宗教を信じる人々と交流していくことが要求される。宗教は文化の重要な構成要素であることが多く、異文化を理解するためにはそれぞれの宗教を学ぶことが不可欠である。本授業では、宗教を理解するための宗教学について講義する。
	宗教学II	この授業では、世界最大級の信仰共同体を構成する唯一神信仰(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム)の諸特徴を宗教学的知見により解説する。世界32億人の人生観の基礎となる唯一神信仰の世界観を基礎概念より正確に理解することで、国際人としての教養を増やすことを目的とする。同時に日本人が無意識にもっている信仰感覚を顕在化することで、宗教色の強い世界における自分たちの立ち位置や意思表示のあり方を検討していく。
	文学I	世界の文学作品を通じて、異なる時代や地域に生きる人々の考え方や感じ方を探り、当該時代の生活や社会状況を知ることは、異文化を理解するための有効な手段である。そこでこの授業では、世界のさまざまな文学作品を鑑賞・分析し、それぞれの時代と地域の文学の特性を考察するとともに、文学作品からさまざまな世界観・価値観や問題意識を読み取っていく。(目的と授業方法は文学IIと同じだが、扱う作家・作品・講義資料等は異なるため、重複して履修することが可能である。)
	文学II	世界の文学作品を通じて、異なる時代や地域に生きる人々の考え方や感じ方を探り、当該時代の生活や社会状況を知ることは、異文化理解のための有効な手段である。そこでこの授業では、世界のさまざまな文学作品を鑑賞・分析し、それぞれの時代と地域の文学の特性を考察するとともに、文学作品からさまざまな世界観・価値観や問題意識を読み取っていく。(目的と授業方法は文学Iと同じだが、扱う作家・作品・講義資料等は異なるため、重複して履修することが可能である。)
	美術史学I	インドにはじまる東洋諸地域(南アジア、東南アジア、中央アジア、東アジアただし日本を除く)の仏教美術について概説する。各地域の仏教美術の代表的作例、世界遺産等をとりあげ、その伝播と変遷の様相について理解を深めることを目的とする。
	美術史学II	日本の仏教美術について概説する。飛鳥時代から鎌倉時代にいたる仏像彫刻の代表的作例、国宝等を取りあげ、同時代の東アジア仏教とその美術の様相に言及しつつ、日本の仏教美術の展開について理解を深めることを目的とする。
	言語学I	人間の「ことば」について考える入門の授業である。その機能と構造はもちろんのこと、人間の認知能力とのかかわりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していく。ただし、あくまでも身近な具体的事例を分析することを重んじる。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。
	言語学II	「ことばの意味」について考える入門の授業である。ことばの意味とは何か、ことばの意味の構造はどのようになっているかを、あくまでも身近な具体的事例を分析しながら考えていく。人間の認知能力とのかかわりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していきたいと思う。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。
	心理学I	人間を一種の情報処理システムとみなす認知心理学の観点から、主として環境から受け取った情報の処理、すなわち環境の認知の過程について概観する予定である。それにより、認知心理学の基本的知識を学ぶとともに、心理学の科学的性格を理解することをめざす。
	心理学II	社会の中で生きる人間の心理過程を扱う社会心理学の中で、主として帰属過程に関する領域について概観する予定である。それにより、社会心理学の基本的知識を学ぶとともに、心理学の科学的性格を理解することをめざす。
教育学	教育の理念、歴史、教育論、教育法等を学び、教育の重要性の理解、教職への使命感の高揚、教師としての基本的資質の修得をめざすとともに、現在の教育課題への理解を深め、教員として自主的・自律的に資質・能力向上を図る態度を養うことを目的とする。	

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
基礎教養科目 A群	社会学I	社会学が扱うのは「社会=人と人との関わり」で、家族、教育、労働、宗教、経済、政治、犯罪など、私たちを取り巻く身近な環境にあるものすべてである。社会学は、このような人間に関する現象や人間生活の仕組み(制度)を観察し、分析し、理解することによって、現代がどのような社会なのかを明らかにしようとする学問である。本講義では、日常の身近な例を取り上げ、個人のパーソナリティや社会的行為に注目する「個人から社会へのアプローチ」と個人間の「相互作用から社会へのアプローチ」から社会の仕組みを読み解き、社会学的な思考や考え方を学んでいく。
	社会学II	社会学の定義、根本概念、諸分野および社会学の歴史などの基礎知識を勉強させ、具体的な事例にもとづいて人間、社会、社会学を理解してもらうことがこの授業の目的である。本講義では、自分の身の回りからより広い社会へと視野を広げ、背景にある社会構造の視点(社会から個人へのアプローチ)から現代社会のさまざまな現象や社会問題(例えば、学校教育、宗教、少子高齢化、格差と不平等、グローバル化、社会的ジレンマなど)について考えていく。
	法学I	法学の基本的な知識を得ることを目的とする。法学とは実際に社会で通用している「法律」を対象とする学問なので、社会に対して目を向け、そこから敏感に何かを感じ取るという姿勢が大切になる。そこで、本講義においては、具体的な模擬的事案を用いて、その事案の中に存在する法について学んでいくという手法を採る。進行状況によっては、テキスト内容とは別に時事的問題について取り上げることもある。
	法学II	法学の基本的な知識を前提にして特に「判例」に着目して勉強を進める。判例には、裁判所にもち込まれた争いを法律を用いて解決した際に下された判断について、結論に行き着いた理由や考え方が書かれている。そのため、判例は法と社会の関係や法についての考え方を学ぶ絶好の教材でもある。判例を通じてさまざまな法の基本原理を学びとっていく。
	憲法I	憲法 Constitution の意義を理解することが最大の課題。特に憲法による人権保障の意義を理解することをめざす。果たして憲法は、他の法律同様、その時々多数派の意向に添って容易に改正されるべきものなのだろうか。近代憲法の原型をなすフランス人権宣言によれば、「権利の保障と権力の分立が確立されていない所に憲法はない」。それ以後、憲法には権利の保障を定める部分(人権論)と国家機関の種類と権限を定める部分(統治機構論)の二つの部分が不可欠とされてきた。したがって、人権と国家(機関)が憲法を考える場合の2大テーマとなる。いずれが欠けても憲法全体を学んだことにはならないのである。本講義では、このうち「人権」に焦点を当て、近代憲法にとってなぜこれが重要なのか、憲法がなぜ他の法令に優越した国家の「最高法規」としての地位をもつのか、その理由を考える。
	憲法II	憲法という「法律」は他の法令と少し違ったところがある。一言でいえば、憲法が立法者を決め、その作る法律に正統性を与えるものだからである。つまり、何が正統な「立法権者」であるかを決めているのが憲法なのである。もちろん、拘束力をもった判決を下す権限をだれがもつのかを決めているのも憲法であり、法的に言えば、そうした諸権限の総体、連鎖が「国家」であり、憲法なしに国家は存在しえない。具体的には、人権保障原理と並んで近代憲法の基本前提とされる「権力分立原理」とはどういうものか、日本国憲法においてはどのように実現されているか(あるいはされていないのか)を見ていく。
	政治学I	選挙権年齢が引き下げられ、大学生であれば誰でも選挙に参加できるようになった。にもかかわらず、多くの学生が政治は難しいとか分からないという。それは日本の教育体制(これも政治の一環であるはず)に問題があるからではないか。教育の現場では遠ざけられてきたが、実は「政治は面白い」ものであり、完全に政治から距離をとることなどできないことを実感できるようにすることをめざす。本講では、主に現在から過去を振り返る視点に立ち、具体的な問題や事例を取り上げながら、国内政治の面白さと重要性に気づけるように配慮していく。
	政治学II	政治学IIに引き続き、「政治は面白い」ものであり、完全に政治から距離をとることなどできないことを実感できるようにすることをめざす。本講では、主に現在から将来に向かう視点に立ち、具体的な問題や事例を取り上げながら、国際政治の面白さと重要性に気づけるように配慮していく。
	経済学I	経済学Iでは、人々の意思決定や市場の機能について理解することを目標とする。具体的には、市場経済におけるさまざまな品物(財・サービス)の価格や取引量の決まり方、市場が社会に果たす役割とその限界、そして市場を補う政府の役割について考える。
	経済学II	経済学IIでは、国・地域全体の経済の仕組みや動きを理解することを目標とする。具体的には、国内総生産の決まり方や、各種経済指標の読み方、金融・貨幣の果たす役割、そして経済の安定化を図る組織である中央銀行の機能などについて学ぶ。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
基礎教養科目 A群	経営学I	この科目では、経営学の基礎を、人と組織の観点から学ぶ。また、経営を遠い世界のものとせず、グループ学習や課外活動の場でしばしば発揮が求められることへの気づきを得て“自分ごと化”するよき機会となる。
	経営学II	この科目では、経営学の基礎を、戦略の観点から学ぶ。また、経営を遠い世界のものとせず、グループ学習や課外活動の場でしばしば発揮が求められることへの気づきを得て“自分ごと化”するよき機会となる。
	統計学I	昨今、私たちのまわりには莫大なデータが溢れている。将来、グローバルな視点から仕事を進めていくためには、こうしたビッグデータを収集し、要約し、分析し、意思決定に重要なエビデンスを創出するスキルを身につけておくことも必要である。基本的な統計学の考え方や手法を学ぶことにより、上述したエビデンス創出までの一連の手順を習得することができる。統計学Iでは、はじめに統計学とは何かについてふれ、その後、データのまとめ方やまとめられたデータの解釈の仕方を身につける。さらに確率変数および確率分布の概念を学び、データの解釈から意志決定までの流れを理解する。
	統計学II	昨今、私たちのまわりには莫大なデータが溢れている。将来、グローバルな視点から仕事を進めていくためには、こうしたビッグデータを収集し、要約し、分析し、意思決定に重要なエビデンスを創出するスキルを身につけておくことも必要である。統計学Iは概念の理解を中心とした授業であるのに対し、統計学IIでは実際に統計処理ソフトウェア (SPSS) を利用して、エビデンス創出までの一連の手順を習得する。はじめに、具体的な例題を用いてデータを整理する方法を身につける。その後、統計的推測の方法をいくつかのデータに応用し、根拠にもとづく客観的な判断であるエビデンスの創出の仕方について習得する。
	化学I	『化学』というと元素記号や反応式を思い出して、嫌だなと思う方もいることだろう。化学は物質の性質や反応を解き明かしていく学問である。最近、物質はこの宇宙を構成している要素のたった4%程度しかないということがわかってきたが、それでも私達のまわりは物質であふれている。自然現象や日常生活の中にも化学はたくさん潜んでいるので、前期の授業では身近な物質や現象の中にある化学の基礎を解説していく。原子の構造や化学結合、溶液の濃度、pHなど化学の基礎が理解できることをめざす。
	化学II	化学IIに引き続き、身近な物質や現象の中の化学を解説していく。身近な物質から宇宙にまで目を向け、生活や環境の中で、化学物質がどのような働きをしているかなど、化学の応用も理解できるようになることをめざす。
	物理学I	ミクロとマクロをテーマに19世紀までの近代物理学を文系的視点と生活者の立場で学び、生きる力を身につける。難しい数式を使わずに身近な事柄を通して自然科学を学び、論理的洞察などの科学的思考力を養い、非言語能力 (図や記号、数字を読み解く力) としての数学のセンスも磨く。身につけたことは就職でのSPI対策や留学のTOEFL対策にもなるのはもちろんのこと、自然を見る目が変わり、世界が今までと違って見えてくる。
	物理学II	時間と空間と確率をテーマに20世紀に明らかになった現代物理学を難しい数学を使わずに文系の視点から学ぶ。SPI対策や留学のTOEFL対策になることはもちろんのこと、時間と空間の科学は私たちの世界観を豊かにし、偶然に支配され観測にも依存する物質たちの挙動を知ると、物質にも生命の源を見いだすであろう。時間とは何だろうか? 人の運命は決まっているのか? エネルギーって一体何だろうか? 生命とは? 授業の中で今まで知らなかった新しい発見がある。
	生物学I	人文系の学生でも「生物としての人間」という視点をもつことは重要である。どのような職業に就こうと、ヒトは生涯のうちにほぼ必ず病気をし、老いる。若いうちに生物学の知識を身につけておけば、自分と家族の健康を守るために必ず役に立つ。この講義では人体各器官の構造とはたらきについて学び、次いで細胞の構造と機能、特にエネルギーの獲得方法などについて理解を深めることを目的としている。演劇や朗読劇を取り入れて、理系科目が苦手な学生にも分かりやすく代謝などについて学ぶ。実利的な面以外にも、「私の身体は (細胞は) こんなすごいことを毎日やっていたのか!」と気づいてもらえればうれしい。講義時間外に、国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係についても体験的に学ぶ。
	生物学II	遺伝、遺伝子、DNA、クローン、発癌性物質、などの用語を目にする機会は多い。しかしその実体を知らなければ、ニュースや記事を目にしても理解できず、例えば遺伝子組み換え大豆を使った食品を食べると良いかどうか、遺伝子診断を受けるかどうか、放射線をどの程度恐れるべきか、意志決定することも難しいのではないだろうか。この講義では生物の設計図である遺伝子とその働きについて、演劇ワークショップを取り入れつつ体験的に学ぶ。遺伝子のもつ情報によりタンパク質ができていくまでの精妙な仕組みに、「私の細胞ってこんなすごいしかけをもっていたんだ!」と気づいてもらえればうれしい。放射線が遺伝子に与える影響や、細胞が癌化を防ぐ仕組み、真核生物の進化についても解説する予定である。講義時間外に、国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係について体験的に学ぶ。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容	
基礎教養科目 B群	自然科学概論I	私たちにとって一番身近な「自然科学」である「医学・医療」をテーマにして、科学の発展と人間や社会との関係について考える。脳死・生体臓器移植、遺伝子医療、終末期医療、生殖補助医療、脳科学研究と精神疾患の倫理、再生医療の倫理などを題材として、受講生の皆さんの興味・関心を取り入れながら双方の授業を展開する。	
	自然科学概論II	私たちの身の回りは「自然科学」の産物で囲まれている。自動車もそうであり、携帯電話もそうである。この授業では「自然科学」とは何なのか、私たちの生活とどのように関わっているのか、私たちが現代社会を生きる上で必要な科学の知識とはどういったものかを学習する。	
	数的思考法	本科目では、あらゆる場面で必要となる「数字を用いて物事を捉え、考える」ための手法を身につける。自然現象、心的現象及び社会的現象を適切に把握し、課題解決に向かうためには、さまざまな現象を数的に把握する能力が求められる。本科目では、ものごとの大きさ、変化、散らばり、要素間の関係、偶然性などを数的に「測る」として「比べる」ことに焦点をあて、さまざまな現象を数字を用いて説明できるような能力を身につけることをめざす。	
	デジタル・シチズンシップ論	本科目では、情報社会を生きる人間として不可欠な、情報を適切に創出・発信・受信するための知識、手法、態度及び価値観を身につける。インターネットを基盤とした現代の情報社会においては、アクセスできる情報を受容するだけでは与えられる情報に振り回されるリスクが増大し、適切な判断ができない可能性がある。本科目では、現在のICT環境において情報が創出・発信・加工・受信される過程を理解するとともに、それらを担う人間として身につけるべき手法、態度及び価値観を修得することをめざす。	
	データ・サイエンス概論	本科目では、適切な方法にもとづいたデータ収集、整理、分析及び可視化に関する手法を身につけ、実際のデータを用いて統計学的に分析するプロセスについて学ぶ。データにもとづいた議論及び意思決定のためには、適切な手法によって処理されたデータと分析目的に適合した統計学的手法を用いることが求められる。本科目では、社会において活用されているさまざまなデータの役割を理解するとともに、性質や形態の異なるデータからデータセットを作成し、統計分析をおこない、結果を可視化するための適切な手法を身につけることをめざす。	
	コンピュータ・サイエンス概論	本科目では、パソコンやスマートフォン等のデバイスを問わず、広くコンピュータと呼ばれるものが、どのように動き、何をしているのかについての基本的な知識と考え方を身につける。私たちの生活はスマートフォンをはじめ数多くのICTによって支えられているが、これらのICTがどのようにして動き、何をしているのかについて理解している人は少ない。本科目では、私たちの生活基盤となっているコンピュータが動く仕組みを理解し、これからの社会においてコンピュータと適切に向き合うための考え方を身につけることをめざす。	
	ビッグデータ解析論	本科目では、ビッグデータと呼ばれる大規模データセットを用いた機械学習の手法を身につけるとともに、人工知能 (AI) の仕組みと適切な活用方法について学ぶ。コンピュータの処理能力拡大に伴い、各種の行動データや履歴等のビッグデータを分析し、課題解決やイノベーションの創出に活用する機会が増大している。本科目では、ビッグデータを利用した機械学習の概要を理解した上で、ビッグデータ解析の手法を身につけるとともに、人工知能 (AI) と呼ばれるものがどのような動きをしているのかに関する知識の修得をめざす。	
	エビデンスと評価	本科目では、エビデンス (信頼性の高いデータ) にもとづいた資料の読み方と意思決定の方法を身につけるとともに、適切な調査及び分析手法によるエビデンス作成の手法について学ぶ。具体的な方策や実践が課題解決に効果的であったかを判断するためには、適切に設計された調査と統計的な分析手法を用いる必要がある。本科目では、エビデンスにもとづいた評価の全体像を理解するとともに、各種の資料をエビデンスの観点から吟味するための手法を修得することをめざす。	
	専門教養科目 Humanities (人間文化)	宗教文化論I	この授業では、ヒンズー教、仏教、儒教、神道などの宗教文化を取り上げて、その思想と文化の基本的な概念と歴史を学び、宗教的・伝統的な世界観・倫理観の固有性と普遍性について考えることを通じて、実際に宗教文化に接触した際の適切な態度と、現代社会における宗教の問題や宗教の可能性について積極的に関心をもち考える態度を育成する。
		宗教文化論II	この授業では、「アブラハムの宗教」と呼ばれる三つの宗教 (ユダヤ教、キリスト教、イスラーム) の宗教文化を取り上げて、その思想と文化の基本的な概念と歴史を学び、宗教的・伝統的な世界観・倫理観の固有性と普遍性について考えることを通じて、実際に宗教文化に接触した際の適切な態度と、現代社会における宗教の問題や宗教の可能性について積極的に関心をもち考える態度を育成する。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
Humanities (人間と文化)	芸術文化論I	この授業では、芸術文化の伝統と革新をテーマに講義を行う。西洋近代の文化的所産である芸術概念から、いち早くグローバル化した現代芸術やエスニックアートまで幅広く取り上げて、芸術の伝統と革新について学ぶ。同時に文化の他の側面(宗教、思想、政治など)との歴史的な関係をも学ぶことを通じて芸術文化に対する理解を深め、芸術文化が人間の生にとってもつ意義や、社会に与える影響などさまざまな可能性を考察する。
	芸術文化論II	この授業では、日本文化における芸術と美意識をテーマに講義を行う。本講義の目的は二つある。ひとつは、学生の芸術文化への感受性を養うこと、もうひとつは、感じた文化性を適切な言葉で論じる思考力を磨くこと、である。ここでいう芸術文化とは、絵画や彫像に代表される狭義の芸術に限らない。歌・能・狂言・茶・花・香・浄瑠璃・歌舞伎・落語といった「道」の古典芸能、あるいはアニメーション・アイドルなど現代サブカルチャーの素材、さらには世捨て人・数寄人・武士などが抱いた特有の生き方の理念をも含む、きわめて豊かな概念である。善／悪、美／醜といった既定の価値観にとらわれることなくこれを吟味することで、批判・批評の作法を学ぶ。具体的には、九鬼周造、和辻哲郎など近代の文化論の着眼点を踏まえつつ、そこからこぼれ落ちたものも含め、日本の芸術文化を根源的かつ総合的に論じる自身なりの視角を構築させる。
	人間と文学	世界の神話、詩、戯曲、小説などさまざまなジャンルの文学作品をとりあげ、言語芸術の多様性にふれる。文学にふれる体験は、日常生活のための利便を超えた言葉の可能性に気づかされる体験でもある。言葉の美的(感性的)効果や作品世界を作り出す力の価値を考えたい。さらに、個々の文学作品に映し出される文化的背景や固有の社会状況、および時代を越えた普遍的な問題意識について学ぶことを通じて、人間の生と社会における文学の存在意義や文化的可能性を考察する。
	人間と思想	人間は、生き方や信念、目的意識を支える基本的な思想を文化背景としてもっており、その意味で、思想は生の基礎となる文化である。また思想は、歴史的に蓄積された思想史と、歴史を批判してその上に積み重なる新たな思想運動によって成り立つ。そこでこの科目では思想史と現代的課題の双方を視野に入れつつ、世界のさまざまな思想をその歴史的・社会的背景とともに学び、各思想文化の固有性と、それが世界の文脈においてどのような普遍的価値をもちうるかを考察する。
	世界近現代史	この授業では、近現代の世界のさまざまな動きや事象に関しての主な歴史的史料、そして歴史研究の知見と成果にふれながら、過去の出来事がどのような過程を経て、今日までの歴史的な叙述や語り、また歴史をめぐる解釈と議論を形成してきたかについて理解する。そのなかで、世界の歴史をとりまく史資料と歴史家の営み、さらにはそれらと一般の歴史認識との関係について、具体的事例とともに理解を深める。そうした講義、また受講者間の議論を通じて、多様な歴史観や歴史解釈に対して、それらを相対化し、批判的に考察する思考を学ぶとともに、現代の私たちの世界が置かれた状況について、歴史的な文脈のなかで捉えることのできる感覚や視座を身につける。
	文化人類学	文化人類学は地球上の多様な地域の人々の異なる価値観やアイデンティティが多様な形で構築されていることを探る学問である。この授業では、多様な社会の文化を比較考察していく。特に、アイデンティティ形成が、ジェンダーを通じて多様に構築されていることを検証していく。具体的には、ミクロネシア、ニューギニア、北アフリカ、アメリカ、日本などにおけるアイデンティティやジェンダーを扱う。異文化の固有性と同時に普遍性を理解するための初歩的文化人類学的理解や視点も紹介していく。
Societies (社会と共生)	共生社会論	人々はこれまでも、自然環境を加工するとともに、自分とは異なる思想や文化をもった人々=他者と共存することによって生活してきた。しかし現代では、テクノロジーの進展によるリスクの増大や他者との遭遇可能性の高まりにともない、自然や他者との「共生」をより意識せざるを得ない。本講義では、現代において共生について考える意義や共生という理念を学ぶとともに、それが自分たちの生活とも深くつながっていることを理解するための視点や方法を身につける。
	社会と多様性I	この授業では、人権、平等、差別の問題を考える。現代社会においては、人種・民族、エスニシティ、宗教、ジェンダー、障がいなど、さまざまな側面から見たマイノリティの問題が課題となっている。マイノリティに対する差別撤廃を求めて社会運動が興隆した歴史も踏まえつつ、教員による講義だけでなく、実際の事例を取り上げて議論を行い、共生社会における市民のあり方について考える。
	社会と多様性II	グローバル化が進んだ現代社会では、人・モノ・情報が国境を越えて移動するために、文化的、宗教的、政治的な対立や葛藤が顕在化しやすい。そのような社会において、価値観や思想の異なる社会集団が共生していくためにはどのようにすればよいのだろうか。本講義では特に現代日本における貧困層や移民の問題に焦点を当てて、教育制度や社会保障制度の現状と課題を明らかにし、多様な人々が暮らしやすい社会をどのように構想することができるのかについて考える。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
Societies (社会と共生)	社会とサステナビリティ	持続可能なローカルコミュニティとは何か。都市と地方、地域振興、観光、災害・防災など「住み続けられるまちづくり」(SDGs11)、について考える。日本は全国的に急速な人口減少に直面している。このなかで、多くの地方自治体が消滅の危機にある。この状況下で、サステナビリティをどのように考えていけるのか。世界の先進各国で採用されている高齢化社会と人口減少への対処策は、移民の受け入れによる人口構造と経済活動の維持である。他方で、いま日本の地方自治体における一部の村落では、閉鎖に向けた準備を始めてもいる。日本での外国人労働者の受け入れはどの程度効果をあげるのか。今後の日本社会はどうなっていくのか。各国の移民政策・人口政策を参照しつつ、考察する。
	現代社会とイノベーション	本科目では、人間社会と技術の相互関係に着目し、技術の発展及び変化が社会システムと人々の生活にどのような変容をもたらしてきたのかについて、歴史的な視点を踏まえながら考察する。さらに、高度な情報技術の進展と社会システムとの相互作用が現代社会においてどのように進展し、将来においていかなる変容をもたらすのかについて、リアルタイムに生じる事例による検討を通じて、これらの可能性と問題点について客観的に分析する能力を身につけることをめざす。
	言語・文化とコミュニケーション	この授業は英語で行われ、言語と文化がどのように関わりあって地域社会におけるコミュニケーションを可能にしているか、またグローバル社会において言語と文化がどのような役割を担っているかを理解することを目標とする。履修者は、文化が言語によってどのように伝達されるかについて学び、言語使用の社会的・政治的な側面について追究する。それによって履修者自身の文化的・社会的背景を理解し、異なる地域社会の人々とともにコミュニケーションを図るべきか理解を深める。履修者は興味のあるトピックについて個人ワークやグループ・プロジェクトを通じて調べ、プレゼンテーションとレポートによって結果をまとめる。
	デジタル・メディアと社会	この授業ではデジタル・メディアを入りに現代社会について学ぶ。メディア論、歴史社会学、情報社会論など複数のディシプリンにもとづいてデジタル・メディアのあり方を検討する。メディア理論と実践の両側面から現代社会の可能性とリスクを理解し、自らの問題意識を養うことをめざす。具体的な学習目標は下記である。 1. デジタル・メディアに関するメディア論および社会情報学の論点を体系的に理解する。 2. デジタル・メディアとインターネットに関するさまざまな社会現象の意味を、理論と実践の両側面での確に把握できる。
	異文化コミュニケーション論	異文化へのイメージ、ステレオタイプ、また、その使い方の意味を読み取り、分析、理解する。この授業ではアメリカ、ヨーロッパ、アジア、日本の映画等を観ながら、話を進める。ここで扱う異文化の問題とは、異なるエスニシティに関わるだけでなく、少数集団やジェンダーの問題等を含めた広い意味で捉えることができる。私たちが意識的・無意識的にもっている異文化に対するイメージがどのように作られてきたか、またどのように人々に共有されているのかを見つめ直すことによって、異文化への新たな理解の第一歩をめざす。
	グローバル・ガバナンスI	「世界政府なきグローバル社会の統治」といわれるグローバル・ガバナンスとは何か。その思想、理念、制度や仕組みについて概観する。グローバル化の進展に伴い、国境を越えたグローバルな課題に対処するためにどのような仕組みがあるのか。この授業ではグローバル・ガバナンスの思想・理念を紹介した後、グローバル・ガバナンスを担うアクター(国際機構・機関、地域機構・機関、国家・政府、企業、市民社会組織など)、規範・法、制度(レジーム)を紹介する。今日のグローバル課題に対処するには、さまざまなアクターがグローバル、リージョナル、ローカルなレベルで複合的なネットワークをつくり、協働して諸課題に取り組んでいる。また学生がグローバル・ガバナンスの担い手として何ができるのかについても考える機会とする。
Global Studies (グローバル・スタディーズ)	グローバル・ガバナンスII	この授業では、グローバル・ガバナンスの実践と課題について学ぶことを目標とする。グローバル・レベルで取り組むべき課題、すなわちグローバル・イシューにはどのようなものがあるか。グローバル社会がめざすべき世界とはどのようなものか。このような問いを通じて、国連が定めた「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」をはじめ、気候変動、人身売買、人権・平等、ジェンダーなどの課題を例にとりあげ、国際機関、政府及び市民社会等のさまざまな視点から、グローバル・ガバナンスの実践とその課題について理解することを目的とする。
	地域とグローバル世界I	本講義では、グローバル・パワーとなったアジアの大国、中国と世界との関わりについて考える。中国の台頭は、米国を中心とする戦後世界秩序に多大なインパクトを与えている。「中華民族の偉大な復興」を掲げる習近平政権は、「一帯一路」政策のもと世界に進出し、それを警戒する米国との対立が深まっている。本講義は、こうした世界規模での地政学的変化を考察し、政治、経済、社会、文化、外交、安全保障など、さまざまな領域で複雑に絡み合うグローバル社会のダイナミズムへの理解を深めることをめざす。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
Global Studies (グローバル・スタディーズ)	地域とグローバル世界II	本講義では、地域から見たグローバル世界との関わり、地域での国際関係や地域機構について、EU (欧州連合) の事例について学ぶ。EUが成立するに至る歴史を踏まえ、地域統合体として現在実施している諸政策や対外関係について理解する。その上で、EUをめぐる諸問題 (ユーロ危機、移民・難民問題、英国の離脱等) に関して、これらの問題の諸要因を多角的に考察し、現状を広い視野から把握することを目的とする。現在の欧州が抱える政治・経済・社会の複雑な様相を総合的に理解することにつなげる。
	グローバル平和論	21世紀のグローバル時代の平和とは何か。平和学からみれば消極的平和 (negative peace) から積極的平和 (positive peace) までを対象とする。国際関係学からみれば、リアリストの平和 (realist peace)・国家の安全保障 (national security)、リベラリストの平和 (liberalist peace)・国際社会の安全保障 (international security)、そしてグローバリストの平和 (globalist peace)・人間の安全保障 (human security) などの平和と安全保障を対象とする。このように平和を幅広くとらえ、平和の思想・概念、理論、そして軍事・紛争、核兵器、人権、貧困・格差、環境など、さまざまな分野における平和の実践例や課題を取り上げる。
	国際法	世界には190カ国以上の国々があるが、国際社会で各国が平和的かつ安全に暮らすためには国際社会独自のルールである国際法を知る必要がある。主権国家が生まれた17世紀のウェストファリア体制から現代に至る国際法の歴史をおさらいし、現代国際法学の分野のなかで、紛争、軍縮、経済、人権、環境、労働、移民など、人々の命と暮らしに重大な影響を与える分野に関する学習に重点を置く。また国際法は国際公務員や外交官の試験においても重要科目である。
	国際機構論	20世紀から21世紀にかけての国際社会の発展の中で多くの国際機構が国際社会をつなぐ役割を果たし、国際協力の担い手となっている。第一次世界大戦後に作られた国際連盟に続き、第二次世界大戦後に創設された国際連合 (国連) が現代の国際機構の代表格であり、さまざまな機関のフォーラムとなってグローバル・ガバナンスを支えている。国連ならびに国連教育文化機関 (UNESCO) など専門機関から成る国連システムの仕組みや課題について概説する。また国連の外の世界貿易機関 (WTO) などの国際機関やAU (アフリカ連合)、ASEAN (東南アジア諸国連合) などの地域機構もとりあげる。さらに、アムネスティ・インターナショナルなどの国際的な非政府組織 (NGO) の果たす役割もとりあげる。国際公務員や国際協力NGO職員をめざすなら国際機構論は必須知識である。
	国際開発論	「開発」を英語に訳すとdevelopmentであるが、developmentを辞書で引くと日本語の「開発」のほかに「成長」「発展」といった意味を含むことがわかる。すなわち、「開発」とはヒトを「成長」させ、社会を「発展」に導くものでなければならないということがわかる。そして、その目標とするところは、「生活の質 (QOL)」の向上と、「住み良い社会」の構築である。なぜ世界には豊かな国と貧しい国とがあるのだろうか。また、人類は貧困問題にどのように対処してきたのだろうか。本講義では、貧困の原因を概説しながら、「開発」という概念がどのように世界では理解され実践されてきたかを解説する。
基礎演習	アカデミック日本語I	大学で学び、研究を行うために必要な日本語能力を高め、論理的に考える力を身につける。主に2つの能力の向上に努める。①論理的な思考能力と②レポート作成能力である。①については、主体的に考え、客観的な根拠を示しながら自分の考えを組み立てるプロセスを実践的に学び、道筋を立てて自分の考えを説明する訓練を行う。②については、レポート作成の基礎を学び、論点を定め、自分の考えを明確にし、文章化する訓練を行う。個人的な意見にならないよう、信頼性のある証拠を裏づけとして実証する必要があるため、文献の内容を正確に読み、要点を整理し、適正な形式で文章を要約する練習も行う。最終的には「グローバル・ディスカバリー (フィールドワーク)」で学修したことを口頭で発表し、文章にまとめることを目標とする。
	アカデミック日本語II	2年次以降の本格的な学修・研究に向けて主に2つの能力の向上に努める。①主体的な課題設定能力と②情報収集能力である。①については、自ら問いを立て、調査・分析し、根拠を示しながら論理的に自分の主張を伝える訓練を行う。自分とは異なる意見を客観的に検討し、一定の論理的根拠をもって他者にも正しいと受け入れられることをめざす。②については、①の課題設定において必要な情報を収集し、信頼性のある情報を選択できるようにする。そのためには、信頼できる情報を多面的に調べる必要があり、大学図書館での文献の探し方なども含め、情報収集の方法を学ぶ。収集した情報を正確に読み取り、批判的に読む練習も行う。
	講読演習	「講読 (HUM:HUMANITIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。この授業では、個々の宗教文化を生み出す源である「教典」およびそれらに関する典型的テキストや代表的研究書の講読を行う。直に「教典」や信仰の文書、信仰に関わる研究書にふれることにより、宗教の基本原則、始源的メッセージのダイナミズムを感じると同時に、グローバル世界における多様性と協働の可能性を発表と議論を通じ模索していく。

科目・区分	授業科目の名称	講義等の内容
演習科目	講読 (HUM) (芸術文化)	「講読 (HUM:HUMANITIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。この授業では、日本の芸術文化に関係する古典文献を味読する。日本の芸術文化の根源は、和歌・物語に帰着する。伝統的に幾度となくリフレインされ現在にまで受け継がれている原点となっている古典作品を素材とし、一字一句揺るがせにせず精確に読み取り、含意を噛みしめ、議論を通して解釈相 (層) を豊かなものに耕していくことをめざす。その際、近世以前の読書作法は主として音読であったことを考慮し、時にゆっくりと古文を音読し、言の葉の調べを耳で味わうことも重んじる。
	講読 (HUM) (文学/思想)	「講読 (HUM:HUMANITIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。この授業では、人生や世界をめぐる問いを探究する文学や思想の文献を読み、それぞれのテキストの問いと世界観、論理とはどのようなものかといった「テキストの意味」を読み取れるようになること、読解に必要な未知の知識について自分で調べられるようになること、そして、テキストと自分の距離を測りつつ、テキストや他の出席者と問いを共有すること、さらにそこから自らの問いを立て論じることができるようになることをめざす。
	講読 (HUM) (歴史)	「講読 (HUM:HUMANITIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。本授業では、歴史研究 (歴史学) に関する文献講読を行う。歴史学に関する基本的な文献を精読し、歴史研究の知識や概念を得ながら、歴史を議論する際の基本的な視座や批判的な思考について把握する。また実際の史料やその用法にもふれつつ、歴史研究における問題意識、分析・解釈の方法、史料の扱い方などについても理解を深める。以上について、受講者による発表と議論を中心に進めながら、歴史的な視点を習得するとともに、歴史研究のために必要な研究文献および史料文献の読解力を身につけることをめざす。
	講読 (SOC) (社会と多様性)	「講読 (SOC:SOCIETIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「社会と多様性」では、「多様性のある社会とは何か」をテーマに、「多様性 (ダイバーシティ)」をキーワードとした基本的な文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (SOC) (社会とサステナビリティ)	「講読 (SOC:SOCIETIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「社会とサステナビリティ」では「持続可能な社会とは何か」をテーマに、「サステナビリティ」をキーワードとした基本的な文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (SOC) (現代社会とイノベーション)	「講読 (SOC:SOCIETIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「現代社会とイノベーション」では、産業革命と技術革新に対する社会のあり方をテーマに、「社会とイノベーション」をキーワードとした文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (SOC) (言語・文化とコミュニケーション)	「講読 (SOC:SOCIETIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「言語・文化とコミュニケーション」では、言語と文化がどのように関わりコミュニケーションを可能にしているか、社会や政治的なコミュニケーションにおける言語の役割をめぐる文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (GS) (グローバル・ガバナンス)	「講読 (GS: GLOBAL STUDIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「グローバル・ガバナンス」では、グローバル社会の「ガバナンス (governance) (統治・協治)」をキーワードとした文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (GS) (地域とグローバル世界)	「講読 (GS: GLOBAL STUDIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。「講読 (GS) (地域とグローバル世界)」では「中国と世界」、「ヨーロッパと世界」をめぐる文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。
	講読 (GS) (グローバル平和論)	講読 (GS: GLOBAL STUDIES)」では、文献の精読・発表・議論を通じて、学問における協働的な探究姿勢とクリティカル・リーディングの方法を実践的に学ぶ。講読「グローバル平和論」では、「戦争と平和 (war and peace)」をキーワードに、平和論をめぐる文献を読み、内容を理解した上で、授業内での議論を通じて多角的な視点と深い洞察力を習得することを目的とする。

科目・区分		授業科目の名称	講義等の内容
演習科目	研究演習	研究演習I	卒業研究に向けてのステップ1となる。人間と文化 (HUMANITIES)、社会と共生 (SOCIETIES)、グローバル・スタディーズ (GLOBAL STUDIES) の3つの専門領域のリサーチ・メソッドを学ぶ。研究テーマを学生自らが探すための第一歩として、研究の方法論(文献精読、ケース・スタディ、比較研究等)を学ぶとともに、「平和を創る」という目的と自己の関心が一致する研究の方向性を、演習での発表と議論、および教員による個別指導を通じて考えていく。
		研究演習II	卒業研究に向けてのステップ2となる。より具体的なテーマの探究・設定、予備リサーチ(先行研究、基礎文献、資料収集)、文献の吟味から研究計画書の策定までを行う。学生はそれまでの本学部での学びを振り返るとともに、演習での発表と質疑応答を通じて自らの研究テーマの方向を定める。教員は授業でのグループ指導と個別指導を交えてその補助を行う。3年次後期のアメリカ留学もリサーチ期間の一環として位置づける。
		研究演習III	卒業研究に向けての最後のステップとなる。アメリカ (SUNY) 留学から帰国後、4年次の1年間を通して、卒業研究に取り組む。卒業研究のテーマを確定し、研究計画にもとづいてリサーチを進め、中間発表を経て、論文を執筆する。教員は授業でのグループ指導と個別指導を交えて卒業研究の補助を行う。
		卒業研究 (キャップストーン・プロジェクト)	研究演習I、II、IIIでの学修を踏まえて、「平和のためのグローバル教養」の3領域 (Humanities、Societies、Global Studies) の知識を総合的に活かして、学生自身が設定した研究テーマに沿って、最終年度の卒業研究 (キャップストーン・プロジェクト) を完成させる。3年次までに培ったクリティカル・シンキング、リサーチ、ライティングを実践し、研究演習III (4年次) で担当教員の指導を受けながら、論文を執筆する。研究の成果は中間発表会ならびに最終発表会にて報告し、研究演習IIIの担当教員とともに複数の教員からも指導を受け、多角的な観点から評価を受ける。